志村 恵「本の中のふたごたち」⑨

探偵としてのふたご・三つ子

イギリスのキリスト教の一派、聖公会の司祭を務めながら数多くの推理小説を書いたロナルド・ノックスに「探偵小説十戒」というのがあります。これは推理小説を書くにあたってやってはいけない十の戒めをまとめた有名なものです。そこには、「犯人は、物語の初期の段階から登場している人物であらねばならぬ」という至極当然の戒めから、「中国人を主要な人物にすべきでない」という、ちょっと首を傾げたくなるような戒めもあります。そして、その第十番目には何と「双生児その他、瓜二つといえるほど極似した人間を登場させるのは、その存在が読者に予知可能の場合を除いて、避けるべきである」という、「ふたご禁止令」があったのです。これは、考えてみると本当に当たり前のことで、犯人が密かにふたごであった場合、アリバイづくりはものすごく簡単になってしまいます。すったもんだしたあげく、一番最後に、「実は犯人はふたごでした」との落ちがあるのでは、そこまで真剣に犯人を推理していた読者にとってドッチラケになってしまいます。

ところが実際、推理・探偵小説を色々と紐解きますと、たくさんの作品が犯人としてふたごを登場させています。もちろん、その多くは安易なアリバイ工作に使うのではなく、ふたご間の確執から殺人が起こったような事件を扱っているのですが。

では逆に、犯人を捕まえたり、推理したりする側は一体どうでしょうか？ということで今回紹介するのは、ふたご・三つ子探偵ものです。

日本を代表する推理作家の横溝正史の初期には、夏彦・冬彦というふたごダンサーが難事件を解決する『双生児は踊る』と『双生児は囁く』という作品があります。しかし、主人公としての探偵、夏彦・冬彦は、やがて金田一耕助にその役を吸収されてしまい、シリーズとしてはこの二つに終わってしまいました。このダンサーのふたごの性格は自由快活で愛すべきものがあり、また、二人の会話も意味深長で楽しいのですが、何かしら軽薄な印象があり、そこが長期シリーズに発展しなかった理由なのかも知れません。僕も夏彦・冬彦に道化的な色彩が強すぎる感じがして、好きになり切れませんでした。

子ども向けの作品としては、やはり笹川ひろしの『どっきりふたご名探偵』シリーズを挙げないわけにはいきません。このシリーズは、外見が全くそっくりの「一卵性」の男女のふたご！？という設定のもとで、この久美、明という姉と弟（という設定）のふたご探偵コンビが、特にそのそっくりであることをうまく利用した「入れ替わり作戦」で、次々と事件を解明していくというシリーズです。舞台背景も、学校の文化祭や、アイドル・タレント、占いの館、ポケベル（今なら確実に「スマホ」でしょう）など子どもたちの学校・日常生活と密接なものをしつらえ、会話もわかりやすく自然で、しかもユーモラスなので、大変面白い仕上がりになっています。ふたごに対する間違った医学的認識や性差のステレオタイプ化など短所も目につきますが、作品としてのおもしろさは確実にあると言えます。

「入れ替わり作戦」を探偵・解決側に使った青少年向けの例としては、他にたとえば宋田理の『ゴットマザーと子ども軍団』シリーズがあります。夫に先立たれて５人の子どもを女手一つで育てることになった、スーパーかあちゃん玉井タマ子が、葬儀社を経営しながらその夫の死にまつわる謎を解く第一作など、礼子・智子のふたご姉妹の活躍も絡んだ好シリーズです。定評ある作家のものだけあって、読後感も爽やかです。また、ふたごが他の家族や友人たちと協力し合うところも暖かな印象を与えます。大人向けのものとしては、それぞれ超人気推理作家の赤川次郎と志茂田景樹の作品があります。赤川次

郎の『ウェディングドレスはお待ちかね』と『ベビーベッドはずる休み』は、片や名門南条家のお嬢様、片や家出して暗黒街の女ボスという性格が極端に違ったふたご姉妹が、「入れ替わり作戦」によって事件を解決する軽快な読み物です。ちなみに赤川次郎の作品には、この他にもふたごが犯人として出てくるものや、生き別れていたふたごが登場するものなどふたごが良く顔を出します。志茂田景樹の『ふたご姉妹の事件簿』シリーズも、同じように超美人でしかもグラマラスなふたご姉妹が大人の魅力とふたごの特性を利用しつつ事件を解決していきます。志茂田景樹のものだけに、それ相応にHなシリーズですから、子どもさんに紹介するときは、必ずご自分で読んでみて、その是非を判断してからご紹介下さい。

ふたごが探偵団を結成するのですが、そのふたごが全然似ていない二卵性双生児であるのがデイビッド・A・アドラーの『ふたごたちはたんていだん』シリーズです。これは、安易に「入れ替わり作戦」を使わないという推理作品としての見識（？）と、二卵性双生児を登場させたという公平さにおいてとてもユニークだと思います。確か作者自身もふたごで、そういう理由から二卵性の双生児登場ということになったのだと思います。原作は6巻のシリーズなのですが、2巻しか翻訳されていないのが残念です。

最後にご紹介するのは、三つ子が登場する作品です。実際は、三つ子が探偵なのではなく、黒服・黒眼鏡の元哲学教授の名探偵夢水清志郎の助手的存在で絡むという構成です。しかし、この一卵性の三つ子姉妹、亜衣、真衣、美衣（英語の活用形から来たこのネーミングは少し困る）は、それぞれが自己主張をする一人一人の存在として描かれていて、しかもそれぞれの視点から物語が語られるという工夫もあり、ストーリー展開のおもしろさと相まって、優れたシリーズになっています。その点が評価されたのか、ＮＨＫテレヴィでリメイクされた上で「ふたご探偵」として放送されました。三つ子がふたごになったのは、主人公に名倉姉妹を起用するためのようです。

ふたご・三つ子が探偵として登場する作品はぞれぞれに工夫があって面白いのですが、ざっと見ると不思議なことに気がつきます。それはふたご・三つ子が探偵として登場すると、その作品はシリーズ化する傾向があるということです。ふたご・三つ子の探偵の登場人物としての魅力なのか、それとも、ふたご・三つ子なるがゆえに、「連れ」を必要とするのでしょうか？？皆さんはどう思われますか？

ペニー・ワーナー：『ふたご探偵』書影

はやみねかおる『名探偵夢水清志郎事件ノート』書影

ロナルド・ノックス（編）『探偵小説十戒』晶文社
デイビッド・A・アドラー『ふたごたちはたんていだん１　マンションれんぞく事件』フレーベル館、全3巻シリーズ
ローラ・Ｅ・ウィリアムズ：『魔のカーブの謎』（石田理恵訳）早川書房ハリネズミの本箱、双子探偵ジーク＆ジェン、全6巻シリーズ
ローラ・リー・ホープ：『ボブシーきょうだい探偵団１　青いプードル事件』佑学社、全6巻シリーズ
ペニー・ワーナー：『ふたご探偵１　ゆうれい屋敷の暗号』KADOKAWA、全4巻シリーズ
赤川次郎『ウェディングドレスはお待ちかね』集英社文庫
　　『ベビーベッドはずる休み』集英社文庫
赤川次郎『ウェディングドレスはお待ちかね』集英社文庫
　　『ベビーベッドはずる休み』集英社文庫
宋田理『ゴットマザーと子ども軍団』光文社文庫、以下全４巻シリーズ（改題して「ハイパー戦士団」シリーズとして、アスペクトからも出ています）
笹川ひろし『どっきりふたご名探偵１　はっとしてシンデレラ』ポプラ社、23巻のシリーズ
　志茂田景樹『ふたご姉妹の事件簿１　背後霊は殺しがお好き』徳間文庫、全3巻シリーズ
はやみねかおる『名探偵夢水清志郎事件ノート　そして五人がいなくなる』講談社青い鳥文庫、全12巻シリーズ
横溝正史『双生児は踊る』『ペルシャ猫を抱く女』角川文庫収録
　　『双生児は囁く』『双生児は囁く　横溝正史未収録短編集』角川書店収録　などなど

『ツインズ』34号（ビネバル出版）から転載・修正